

口語詩句投稿サイト72h

ことばの力詩集

2026年7月 第69号

口語詩句投稿サイト72h



ことばの力詩集

2026年7月 第69号

選者

暮田真名（川柳人）

3

小島なお（歌人）

11

杉本真維子（詩人）

17

高橋修宏（俳人・詩人）

24

立花 開（歌人）

31

西躰かずよし（俳人）

38

林 桂（俳人）

48

龍 秀美（詩人）

55

暮田真名 選

垂々（埼玉県）

あらがえるじゅもんに
あつたことがない

「じゅもん」という単語やひらがな表記が、初代ドラゴンクエストを彷彿とさせる。内容を読むと、つまり、すべての呪文に従わされてきた、ということになる。徹底的な受け身の自覚。発言者が勇者だったらおもしろい。

曾我門出（新潟県）

二十年前のチョコやる、

夢ダムの、

ほら、

放流みたくおまえにやる

「夢ダム」という造語の力。二十年前のチョコを贈答する行為はもはやフードテロと言っても差し支えないが、「夢ダムの放流」によって危険さは後景に退き、どこかノスタルジックな甘やかさが残る。

y o h e i
（東京都）

しらす　です　人　です　よ

しらすと人間が対峙する。「しらすですよ」「人ですよ」と自己紹介しあう。そんな漫画の一コマを想像した。このとき、しらすと人は食べる―食べられるの一方的な関係ではなく、相互的な関係である。

まちのあき

(岐阜県)

ねむたいね

(humming)

春のせんたつき

ワキのしたから

新芽生える

「ねむたい」、「humming」、「ワキ」、「新芽」、形

林 淳
(大阪府)

を持たなかったり、持っていてもやわらかかったりする、輪郭の曖昧な言葉が並ぶ。四角く重たい洗濯機は異物だが、「春のせんたつき」に変身し、彼らに溶け込む。

青年のクリアファイルに差込んだ 現金九万円俄雨

「現金九万円俄雨」の漢字の並びは、そこだけ中華街に迷い込んだかのような情感を生む。財布ではなくクリアファイルにしまわれる現金は、すぐに青年のもとを離れることを予感させる。物語のある一首。

川瀬十萌子
(茨城県)

カトラリーぎいんと落ちて死後

「ぎいん」という擬音は、銀色を思わせると同時に、食器を囙んでしまったときのような脳に響く感触を生む。下五の字足らずが生む余韻は、カトラリーが落ちた床の下に彼岸のような空間が広がっていることを予感させる。

深谷健
(埼玉県)

さようならまた会いません

枇杷ゼリー

言葉として自然な「もう会いません」ではなく「また会いません」であるところに屈折がある。「また会い

ましよう」をぎりぎりのところで「会いません」に転換させる、抵抗だろうか。ゼリーに閉じ込められた枇杷は沈黙している。

たな (静岡県)

鳩サブレ同士で

キスは無理なもの

彼の土産を雑に頬張る

「鳩サブレ同士のキス」は、書かれていない人間同士のキスを思わせてなまめかしい。歌の中ではそちらへ向かわず、口を使つてできる他のこと、つまり捕食へと向かう。想像でキスをしていた鳩サブレの頭が食われてなくなる。

潮田央（東京都）

帰らない子どもは改行してしまえ

家に遊びに来た子供の友人が帰らない、という、親である人間の苦悩を想像した。改行というのは胴体を真つ二つにして並べるようでなかなか怖いが、そうか、詩の改行はあるべき場所に帰ったのか、と気付かされる。

絵巻（東京都）

歩けぬよ

薔薇園の香は厚すぎて

「強すぎて」「濃すぎて」ではなく「厚すぎて」としたこと、ビロードのように実体を持った薔薇の香りが

歩行を阻むようなイメージを、鮮やかに想起できる。
「歩けぬよ」という時代がかった口語は、鈍重な歩み
を思わせる。

小島なお 選

飛和（長野県）

初夏の中にミニチュアの宮殿

精巧に作られた宮殿はこれから訪れる盛夏の象徴にも
思える。緻密に入り組んだ、陽射しを閉じ込める絢爛
かつ混乱な構造物を巨人の私がこわごとと覗く。

中矢温（東京都）

だから身体が

だんだんバスケする団地

ドリブルする「だ」の音が五回。「だんだん」の韻律の加速にレグスルーを想像したり。バスケットをする身体性が個の肉体と共同空間をシンクロさせる。

カムイカンテ (東京都)

真夜中の臍はやりたいことだらけ

酸素や栄養を通す穴であつた臍。肉体が減じるまでを
癍痕として在るばかりになつた臍は、宿主の身体の中
心地で火口のように意思を湛えて鎮まっている

彩燈琴璃 (東京都)

見晴らしをあなたにあげる

モネの雪

神澤保仁
(神奈川県)

数多くの雪の絵を描いたクロード・モネ。そのどれもが雪の視点を思わせて俯瞰的。雪片に仕舞われた情景の記憶を「見晴らしをあげる」とした鮮やかさ。

湖がプレーントウを履いて初夏

縫目のないつるんとしたつま先の靴を履く湖。風いでいる水の器の汀を思わせるプレーントウは湖によく似合う。つま先からひたひたひかりを零して。

安野まる
(神奈川県)

生命線おそろいにして夏が来る

もし運命や寿命を誰かとおそろいに行けるなら、どん

なにか安心してこの世を暮らせるだろう。同じ夏が来れば、最期にも同じ思い出を共有できる。

いまはじまるの

(兵庫県)

私まだ幸せと手を繋いでて
今はサメの形をしている。

いずれ手を離すときが来るのだろう。繋がっていられる今でさえ形は変わり続ける。たとえそれが獰猛な姿に見えたとしても、辛うじて私は幸せなのだ。

大月陽星

(茨城県)

愛国心が照らすバーバパパの脚

脚を持たないように見えるバーバパパは、状況に応じ

て脚をスキー板や車輪に変えられる。愛国心が不意に傾くときの幻影を見いだすような危うさと思う。

互井宇宙論（埼玉県）

飴色に溶け出すなかで眼を閉じた
ひとから夢の標的になる

葛原妙子の「しづかなる的」が淡く香る。夕暮れのように飴のように、世界との境界に溶けはじめるとき、存在することそのものが標的となりえると悟る。

Nbox（東京都）

手作りのカービィの今泣いていて
代わりにジュレを吸い込んだ唇

戦うためにあらゆるものを呑み込みつづけて膨れあがった星のカービィ。心身を癒やすジュレさえも受け付けない彼／彼女のために次は私が吸い込む番だ。

杉本真維子 選

こにおん (埼玉県)

文旦の薄皮を剥けば
青、青、あお、あお

「青」と「あお」、表記が違えば、たしかに別の言葉だ。
五十音しかないことの不自由さは表記の豊かさによってこのように超えられている。

金井晶 (宮城県)

縮尺のいかれた花が
廃寺の鳥瞰図にはいくつもあつた

「いかれた」という言葉の使い方が秀逸。狂気的美さ
え微かに滲んでいる。

常田瑛子（山口県）

百年の嘘を挟んだ
クリアファイルは
ゴツゴツと光を弾く

「ゴツゴツ」という聞き慣れたオノマトペが未知のものへと変容させられている。この「ゴツゴツ」という
手ごたえはたしかにまだ誰も知らないものだ。

互井宇宙論（埼玉県）

百合の影に憩う眼のそれから
泳がせる靖國のひるなかへ

「百合」と「靖國」。ひるなかへと突入する眼の戸惑い。どうしても戦争の幻のようなものをこちらに見せるが、誤読だろうか。

カムイカンテ（東京都）

真夜中の臍はやりたいことだらけ

お臍のポテンシャルに気付かされた。どんなに疲れていてもお臍だけは元気いっぱいなのだ。

植田遥大（神奈川県）

コンビニの強いひかりに集っては
行方を明かしたいわたしたち

なんと言つても「行方を明かしたい」がいいと思う。
強いひかりに誘われる理由をこのように書くのは簡単
なことではないはず。

緒方鳩（東京都）

シャンデリアは客船の形に
落ちて 轟 く光の尾の
燃えながら

激しい炎をそのかたちのままに言葉で描いたら、この

ようになるのだろう。絵筆のようなタッチが印象深い。

自オシヨウ (富山県)

リングの皮を

手で剥けるかと

問われたら

かなり難しいと

言わざるを得ない

言葉の外殻と内容が一致しているとところに注目した。
誰にもほどこけない強固なフォルムだ。

川瀬十萌子
(茨城県)

昼中のバスの中まで青葉影

われらひとときルノワールの絵

名画体験というべき素敵なひととき。一方で、生身の人間が一瞬で額縁に収められる、という意味ではシビアな表出でもある。

高祖にたまご
(岡山県)

講堂に耳をすませば

雑音は

おおきなけものが唸るような

うみ

耳をすまさなければ聴こえない波動に、透明なものの
のかたちを与え、見えない危機を描きだしている。

来月も楽しみにお待ちしています。

高橋修宏 選

潮田央（東京都）

来賓の皆様 そつと卵とじ

「そつと卵とじ」が、凄い。どこか祝賀会や披露宴など、晴れの日のパーティのようだが、優しく見せながらも、どこか残酷な気配も立ちこめる。同じ作者による「帰らない子どもは改行してしまえ」にも注目した。

柳留人（滋賀県）

プラスチックに貼り付く
プライバシーだけ
燃えるごみ

若山かん菜（神奈川県）

昨今のゴミ問題をめぐる批評のように、まず読みを誘う。しかし、「プ」音の韻を踏みながら、その表象と意味がナンセンスの方へとずれこんでゆく。

母の日のカーネーションが

置き配で

届き廊下で一夜を明かす

最近、『置き配的』という批評書も注目されているが、まさに「置き配」とはモノを届ける意味や価値を変えてしまった。母に感謝を伝えるはずの「カーネーション」もまた、直接手渡されることなく「廊下で一夜」を明かしてしまうように――。

葉ざくら（愛知県）

病院を回されてゐる日の椿

何より「病院を回されてゐる」から、パンデミックの際の逼迫した医療状況などが想起される。結語に「椿」へと転じてはいるものの、その危機的な気配だけは、しぶとく残りつづける。

小林セオ（千葉県）

ミツキーを悪者にして返り咲く

「悪者にして返り咲く」のは、誰なのか。あるいは、「ミツキー」自身なのだろうか。悪も善も、たえず入れ替え可能となった世界に、われわれが生きていることへのカリカチュアとしても読める。

机
(京都府)

思わず手に取った

トマトの傷跡が

友人のそれによく似ていた

まず「トマト」によって、真赤な生々しい傷跡がイメージされる。そんな痛々しい「傷跡」を、同情や共感未満の眼差しで、ただ作者は見つめているのだろうか。

山本仮名
(神奈川県)

夏雨の降り続いてるマップにも
増えてやめないヒト科ヒト属

2000年代以降、日本人の少子化という話題が、た

そらうた (長崎県)

びたび大問題のように取り上げられる。だが、世界(地球)単位で見たならば、年々「ヒト科ヒト属」は増えつづけている。そのことが、環境危機や食料問題などの根本要因のひとつであることは明らかだが、日本の少子化を語るとき、すっかり抜け落ちていようにも感じるのだが…。

黒豆の煮汁を飲んだら マリアカラス

「マリアカラス」と言えば、伝説的なオペラ界の歌姫。かつて、サナダムシを吞んでダイエットに成功したという噂話を聞いたことがあるが、ここでは「黒豆の煮

汁」。もしやすると、その歌声を良くする効果などあるのだろうか。一方、ナンセンスな気配も漂う。

猪山 鉦一
(神奈川県)

レシートが長かったから雨だった

「から」で結ばれているものの、その意味の連関は脱臼されている。だが、「長かった」と「雨」に注目すると〈長雨〉と言葉が浮上してくる。そして、〈長雨〉とは〈眺め〉にも通じるのだが…。

美鷹 周
(福島県)

見えない森に

たぶん何かを置いてきた
ような気持ちで教室にいる

「見えない森」とは、その人の心の中にある原風景と呼べるものなのか。そして、われわれはそこに「何か」を置き忘れたような気持ちのまま、日々過ごしているのかもしれない。抽象的でありながら、実感を招きよせる佳作。

立花 開 選

ケムニマキコ（京都府）

陽炎をメトロノームでかき混ぜる

正しく振れるメトロノームの針は、不規則なような秩序ある自然を悪戯に狂わせる。「異端」とは大抵がそういうもので、本人に自覚はなくともそこで作られた秩序を変えていくのだ。かき混ぜられた陽炎のその後が気になる。

にわ
(栃木県)

文旦を剥いて

まあるくならべましよ

はるのよろこびに、きいろ

誰に話しかけるでもない、優しい語りかけ。柑橘系の
さわやかな香りが「まあるくならべ」た形に漂つてく
る。よろこびにも色を感じている。可視化された香り。

ムクロジ
(群馬県)

もの思いに沈み浮かんできて桜

もの思いに沈むことに質量を見出した。沈んで浮かぶ
様は、水の中にいるような清涼感を読者に抱かせる。
水面に浮かんで目を開けると満開の桜があった。悩む

時、心は魚のようになるのかもしれない。

互井宇宙論（埼玉県）

相槌まばらにかざぐるま

終わりの気配に満ちている。近くにはいても、心がありにも遠い。相槌がうすくなるほど、その背後で回るかざぐるまの存在感は一層濃くなる。

天野奏（埼玉県）

速さから生まれたあだ名

抱え夏

足が速い人にのみ与えられるあだ名。選ばれた者であり、しかしそこから逃れられない場所にもなる。特徴

夏野清暁
(東京都)

から生まれた名は、本人を薄くさせる。あだ名から本人の生身の部分は少しずつ削れ、風のような「速さ」だけの存在になってしまいうだ。

青葉、若葉

瓦礫の下に本

まだ片づけられない被災地を描いた作品にも、廃墟に遺された書籍に想いを馳せたものにも見える。人を失ったあとの「日常だったもの」の存在は、自然界では異分子でしかない。青葉溢れる場所に、読まれることを夢見る本が眠っている。

森川 紬
(福井県)

薄目で見ればポインセチアの風車

両目を開けたら、本当は何が映るのか。見たくないものは、目を背けた方が楽だ。あえて直視しないという処世術もあるくらいだし。薄目で見れば、この世はなんでも優しくて美しいポインセチアの花。幸せかは、わからない。

牛田 悠貴
(東京都)

参考までに煮えくりかえる

データとして収集する怒りの感情。振り切れるまで怒ったことがないから怒り方を知らないのだ。次からは、怒りたいときにしっかりと怒りを表現するため客

羊谷 (兵庫県)

観性を抱きつつ激高する。だがおそらく、次回も初回との差を検証しながら怒っていると思う。

サカナクシヨンを聴いて

包まれた餃子

「クラシックポーク」は生きている間にストレスを与えない飼育法をされた豚のこと。餃子の肉だねはすでに処理済の食用肉であり、ストレスも何もないのだから、しっかりと楽しい音楽を聞かせる。餃子は耳のような形をしているし、皮に包み込まれた音楽の味があるかもしれない。

みかん
(群馬県)

回鍋肉のおいがして悲しい 雨の日

理由がないと悲しさを認められないときがある。本当は、最初からずっと悲しかったのだ。雨が降っているし、おいしい出来立ての回鍋肉のおいが漂ってくるし、冷静でいるほうが無理なんだ。たくさんの言い訳をして、やっと触れる悲しさ。

西躰かずよし 選

そらうた
(長崎県)

手をあげると明かりがつく

外来病棟五階午後六時

「手をあげると明かりがつく」という一節から、トイレや廊下に設置されている自動点灯の明かりが想起される。そして、それにつづく「外来病棟五階午後六時」という場所と時間の設定。ひとりの患者の生をあざやかに映す明かり。

まちのあき
(宮城県)

缶底のコーン

を

宇宙にかかげた

ら

光っていつてしまう だろうか

「ぎゅうにゅうも／さとうも／はつがじょうけんで／
どうだつてよくなつてゐるプリン」これも同じ書き手の
作品。この人の作品では、コーンやプリンが擬人化さ
れる。ただ、それは技法としてのものというより、語
り手にとって世界はどのように見えるという、ある種
の切実さを内包しているように見える。そこには、こ

の世界に生きるコーンやプリンへのやわらかなまなざしがある。

中矢温 (東京都)

馬鈴薯がゆっくり冷める結婚式

友人の結婚式を見る際に生じる居心地の悪さ。それは語り手が、人の幸いを手放しでよろこべるほど、平穏な場所にはいないからかもしれない。「馬鈴薯がゆっくり冷める」という一節は、そうした複雑な感情を、肌感覚にも似た時間の長さで表わしている。

有明
(新潟県)

雨の日は

フランスパンを食べたいって

そういう事になっている

何の関係もない雨の日とフランスパン。食べたいたい
いうことのなかにある理由のなさが、ただ正しく、切
ない。

金井晶
(宮城県)

教わった花の名前を思い出す

速さはほとんどバスだと思う

速さⅡバスではなく、ほとんどバスというところに惹

高祖にたまご(岡山県)

かれる。名前を思い出すことや、速さがバスになるというのは、あいまいなものが輪郭をもつ瞬間と言えるだろう。かつての追憶が生まれると同時に、これまでには感じられなかった実感をともなう、うつろいにも似た速さが読者へと差し出される。

講堂に耳をすませば

雑音は

おおきなけものが唸るような

うみ

講堂の雑音が、けものの唸るようなうみになる。それは、耳をすませなければ聴き取れないような、しずけ

川上真央（東京都）

さから生まれる。不安と地続きのしずけさ。語り手にとつてなくてはならない雑音によつて、世界はわずかに清潔になる。「ほこほこと／白のガーベラが咲いている／助詞はわたしのつめたい酸素」もおなじ作者の作品。沈黙へとつながる、助詞とうみ。

うれしきは喉にまるまり夏芙蓉

うれしさとは、どういう感情を表すのだろう。やわらかなうれしさ。それが喉の奥の感触へと変わる。夏芙蓉が、夏の時間を止める。

乾いたスポンジ

(広島県)

海を埋め夜空がぬるい街に戻り

小鼠はいつミッキーになる

ミッキーになること。それは、生きていく覚悟の表れなのだろうか。「海を埋め」や「ぬるい街」といったことが、ざらざらとした生をそのままに引き受ける。

なかむらそつ(長野県)

りっか ぜんそく くすり

リボンへとつづくことばは

さらわれました

しりとり「りっか」のあとをつなぐことばの不在と「ぜ

松浦やも
(東京都)

んそく」以降につづく、しりとり。しりとりが「ン」で終わるように、そこで、ことばもさらわれる。不意におとずれる静けさがなつかしさを呼ぶ。「蝶々に憑依されたい左眼は／二重ガーゼのみずうみで待つ」これも同じ作者の作品。いずれも抽象的でありながら、そこに置かれたことばは、どこかなつかしい。

前の人の

S u i c a の残高少なくて

海から帰るところ

とおもう

緒方鳩 (東京都)

自身と無関係な前の人。その人の S u i c a の残高の少なさを見て、海からの帰りと思う語り手の心境は、おだやかだけれどもさびしい。それは、夏休みの最後の日のように、終わりの予兆を感じることから生まれたに違いない。

陶器店更けて少女になる取っ手

陶器店が更ける。店じまいとは書かない。ただ更けていく。作品のなかの「取っ手」ということばが、今は無き大切なものへの手掛かりになる。「少女になる」という一節は、穢れなきものへの回帰を予感させる。

滝春子
(京都府)

祝日の花を匂えば手の中に

雀はそつと潰れてしまう

花を匂う。祝日を確かめるかのように。それは、愛ゆえに傷つけてしまうという逆説を表す。「そつと」が、かなしみを加速する。

林 桂 選

葉ざくら
(愛知県)

宇宙船からも廁が見えてゐる

宇宙からの映像は、数十センチの単位で識別可能になってゐる。もちろん、トイレも見える。ただ、そこに焦点を当てて考えたり、論じたりすることがないだけだ。その焦点を当てただけで、宇宙からの映像の本質を言い当てようとしている。

深町明
(福岡県)

ハーレーの男六人ところてん

深谷健 (埼玉県)

ハーレーダビットソンの低いエンジン音を響かせてのツーリングを時々目にする。この作品の「六人」くらの団体が多い。年齢は、中年、熟年といった落ち着いた感じ。しつかりした編隊でスピードもそれほど出しはしない。そんなメンバーが休息がてら、ところてんを食べている場面を想像する。ライダーたちの属性を、「ところてん」で言い止める。

初夏だねえ

ゼリーっぽいよねえ世界

世界をゼリーぽいと理解することで見えてくる「世界」が確かにありそうに思える。半透明に歪んでいそうだ。

でも暗い印象ではない。

机 (京都府)

いつだって一人称の人差し指

「指差し期」というのがある。一歳前後の発達期に現れる。指を指して自分の欲求を伝える。そのとき人差し指は、自分自身だったのだと知る。「いつだって一人称」は卓見だろう。「指指し」に始まる機能をそのまま名前に残しているのだった。

三時 (東京都)

青嵐らせん階段駆け下りる

青春の自画像として読んだ。

なかむらそう(長野県)

たましいへねかしつけられ

水 平 線

六条御息所の生き霊は、本人が眠っている間に身体を離れてしまうのであった。「たましいへねかしつけられ」は、眠ることは魂になることだというのだろう。身体を離れる行為としての睡眠。「水平線」は、身体性を脱した魂の場所のありかか。

夏山栞
(東京都)

雨として降る春の雪

しんしんと

わたしにも死がいつの日か降る

冷たい春雨が降っている。この雨はあるときまでは、雪だったのだと思う。わたしの生もいつの日か死に変わる。「しんしんと」はどちらにも掛かる位置に置かれ、繋ぐ役割をしている。

睦月雪花
(愛知県)

だとしても

生きるしかないときがある

ガラス片にも映り込む虹

常田瑛子
(山口県)

「だとしても」の前には、不如意な出来事が省略されている。しかし、私たちの生活の過半は、その思いに比べて、不如意だろうと思われる。そうしたことを生活のベースに受け入れながら、生きるしかないのだ、と思う。「ガラス片にも映り込む虹」の美しさも、そんな視線が発見したものだ。

箱買いの梨を配り終えたあとの
月はすべてが冷たい空き地

何を書いているのだろうかと思う。殆ど大気のない月では寒暖差が大きく、「すべてが冷たい空き地」という訳ではない。しかし、地球から見る月は冷たい光り

に満たされている。現在、利用されることのない「空き地」でもある。梨を箱買いしたのは、親族や知人に配るため。円滑な交友圏が想像される。この二つ。どう結ぶのか。書かれているのは日常の穏やかな時間なのだろうと思う。こんな言葉で書けるのかとも思う。

龍 秀美 選

飛和 (長野県)

世界から借りた光に
花の名をつけて私の瞳に宿す

色やかたちは光によってできており、その光は仮に花のかたちになって見えることの美しい発見。

石村まい (兵庫県)

空に泉ひそやかに湧く
一生の鳴咽を
鳥の生業とおもう

白馬（静岡県）

鳥のさえずりは空に湧く癒しの泉のようだ。私のためにさまざまに啼いてくれる鳴咽のように。

るるめんめん　るるめんめん

呼吸　るるめんめん

縷々とくどき、綿々と語る。平仮名の楽しさ。

佐藤橙（鹿児島県）

姓名は半透明な檻として

名付けられることによって総てのものは存在するが、それはまた命名によって規定されてしまうこともある。

もりれい
(大阪府)

これは秘密

倚りかからない私の

風邪をひかないための詩

「倚りかからず」という矜持は現代としては、風邪をひかない用心くらいという気配がする。

蝸牛
(奈良県)

来世でもただ平均を好きになる

一番多くの人を選んでいるものが「平均」なら、それは「今生」の「現代」の判断ですね。AIもそうかも。

寒翠（兵庫県）

戦国図は前線に似る

暖

と

寒

七雄はみな雨域をひろぐ

Z型の「前戦」図。「ひろぐ」はこの場合、口語のうちか。

大江らま（東京都）

発音は程なく声になっていき

身体をはみ出していくパノラマ

声の無い意志が発音されて、物理的な波として展開す

るありさまを目に見せてくれる。

なみなみ (広島県)

暑氣払い

空豆ひとつぶ

アチチアチチと

拾い上げ

「アチチアチチ」という反射的に出る言葉と動作がリアルで楽しい。暑氣払いになるだろう。

雨宮慈（静岡県）

かわいいね

生まれてくれて

ありがとう

七五調で話す母に

自由律な泣き声響く

この世の言葉を話す母親と、いまだヒトになつていない新生児が発する声とに、これからの期待に満ちた成長を感じる。

田畑味（東京都）

良い部屋だけど相撲に欠ける

石井友禅
(大阪府)

部屋の強度などと言わず、欠けるものは「相撲」だという。ドスンドスンと四股を踏まればそうだろう。部屋が揺れる様子が笑いと共に見える。

夜はきつと空の病気で

きみの病気でもある

その度わたしは眠る

夜が暗いのは空が病気だから。きみもそうだから、私はその度受け入れて眠る。精いっぱいの優しさ。

松浦やも
(東京都)

前の人の

S u i c a の残高少なくて

海から帰るところ

とおもう

勝手に思っているだけなのに、とても納得してしまう。
西瓜割りなんかを連想するからだろうか。

口語詩句投稿サイト 72h

www.kougoshiku-toukou.com

ことばの**力**詩集

2026年7月 第69号

掲載作品 2026年5月投稿分

発行日 2026年7月1日

発行 公益財団法人佐々木泰樹育英会

東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー 40階

TEL.03-6278-5595 FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壺氏によるものです

編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル

AD＝榎本了壺 D＝坂口真理子

印刷・製本＝株式会社グラフィック

ISBN 978-4-910485-75-1

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円 奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

選考結果開示日：2027年3月18日

授 賞 式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円 高校生12万円 大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投 稿 期 間：2026年2月1日～2027年1月31日

選 考 期 間：2027年2月1日～3月5日

採用書類提出締切日：2027年3月12日

選考結果開示日：2027年3月19日

奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください

<https://sasakitaijuikueikai.or.jp/>

後援

一般社団法人現代俳句協会

株式会社思潮社 現代詩手帖編集部



9784910485751



~~1920192000390~~

発行 公益財団法人佐々木泰樹育英会